舌に人工的な甘さがまとわりつく。飲み込んでも飲み込んでも口内に残り続けるそれを、田辺渚はあまり好んでいなかった。じゃあどうしてそれを買ったのかと言ったら、購買のパンコーナーで売れ残ってた姿が可哀想だったからだ。渚の情はよくわからないところで働く。

すぐそばから流れていた木管楽器の音色が止まる。直後に、楽器を置く音。それに釣られるように顔を上げると、パイプ椅子にもたれた音の主がこちらを伺っていた。

「なんで今食べてんの？」

「昼休みに食べきれなかったから」

「え？それだけなのに？」

「友達と熱い会話を繰り広げてたの」

「ふうん」

少女はまるで興味が無さそうに、大きく伸びをした。ずり下がったシャツから、白い腕が露わになる。昔と比べて茶色が強くなった長い髪が、重力に従ってまっすぐに落ちた。そんな友人の姿をこれまた興味が無さそうに眺めながら、渚はクリームパンを咀嚼する。何だか気持ち悪くなってきた。

「リン、これ残り食べてくれない」

「無理。今練習中だし、また歯磨かなきゃになる」

「あ、そう」

一体何を期待してたの？　心の中の、もう一人の自分が笑う声がする。握られたパンのビニール袋がくしゃりと音を立てた。

友人は「よし」と体勢を起こすと、再び楽器に口をあてた。細い指が、キーの上を滑らかにスキップする。その滞りない動きは、彼女の今までの努力を物語っていた。

甘情

とうふ

「どうして川上さんと、あんなに仲良いの？」

「…え」

渚はパンの袋を破るのを思わず止め、目の前で茶色いお弁当をつつく友人の顔をまじまじと見つめた。彼女は行儀悪く、プラスチックの箸に肉団子のタレを絡ませている。美味しそうだな、なんてひどく場違いなことを渚は思った。

「聞いてる？」

「え、うん、凜のことでしょ？」

「川上さんのことというか、まあ、うん」

噂になってるよ、二人のこと。

その声は、注意しないと昼休みの喧騒に掻き消えてしまうほどか細いものだった。なんだか、めんどくさいな。過去の様々な出来事が思い出され、渚は無意識に眉根を寄せる。渚は重い話や感情的な相談事がとても苦手だった。元来、何事も深く考えずに行動するタイプである。誰かを能天気に励ますことはできても、気持ちに寄り添って親身になることは向いていない。

湧き上がりそうになるため息を飲み込んで、購買で買ったクリームパンを机に放置する。そいつを腹に入れるのは、もう少し先になりそうだ。

「どうして、急にそんなこと聞くの？」

「気になったから」

箸が肉団子に刺さる。いとも容易く貫通したそれは、相変わらず安っぽい色にまみれていた。

「川上さんって特進クラスだし、体育も別に合同じゃないし、部活も違うでしょ。なのにどうしてかなって」

「塾が一緒なの。それで少し話すようになっただけ」

「でも、噂では、キスしてたって」

今度こそ渚はため息を吐いてしまった。目の前のうつむ

いた頭がびくり震え、こちらの表情を伺うようにおずおずと上がる。その頃には渚はすっかり、人のよさそうな笑みを貼り付けていた。誰も拒まないのに、誰も近寄ることはできない。そんな笑顔。
「キスって、恋人同士でするものでしょ。私と凜はただの友達だから、そんなことしないって」
「そう、だよね」
怯えたような表情が一気に柔らかくなる。事実を話しただけなのに、簡単に安心するんだな。渚は冷めた気持ちでそれを眺めた。例の肉団子はようやく彼女の口の中に運ばれる。渚はもう、それを美味しそうだとは思わなかった。

昼休みの出来事を流れるように話終えた渚は、鞄から取り出したミネラルウォーターを盛大にあおった。カスタードクリームの甘さが、ぬるい水と共に胃の底に落ちていく。
「やだ何その噂、面白いねえ」
思いきり当事者であるはずの川上凜は、まるで他人の噂話を聞いているかのような反応をした。あまりにもころころと笑うので、渚としては、彼女の膝の上にある何十万もする楽器が床に落ちてしまわないかと不安で仕方ないのだが。一人はらはらしていると、凜はようやく笑うのを止め、しかし顔いっぱいに「面白い」という表情を浮かべながら手を叩く。
「してみる？　実際に」
「何を？」
「キスを」
「馬鹿じゃないの」
「言うと思った」
そう言ってまたきゃらきゃらと笑い始めるので、渚はついに彼女の楽器を膝から取り上げた。銀色のキーがきらめくそれは、凜が中学の頃に買ってもらったものらしい。何という楽器だったかは忘れた。
「なんでそんな噂流れたかな」
「あれじゃん、この前私の顔に虫付いたじゃん、それ取ってもらってた時見られたんじゃん」
「それ、かあ」
一週間以上前のことだった気がする。珍しく二人でお昼休みを過ごしていた時、凜の目の近くに小さい虫がとまったのだ。擦ると危ないし、かと言って目に入られても面倒なので、渚がそれを取ってあげただけ。確かに必然的に距離は近くなったし、角度によってはそういうことをしているように見えないこともないかもしれない。それにしたって、わざわざ噂になるようなことか、と渚は思うけれども。
「みんな暇人なの」
「女子校じゃんここ。飢えてるんだよ、そういう話題に」
「それ凜だけじゃないの」
「そんなことないって、絶対」
そう言いながら、凜は渚の方に手を伸ばした。渚はなぜか一瞬身がこわばるのを感じたが、何事もなく素通りして自分の手にある楽器の方に向かう手に、弛緩する。
「…その楽器の名前、なんだっけ」
「オーボエ。三日前にも言った」
「なんか存在感薄くて」
「失礼過ぎない？殴るよ」
オーボエを鈍器のような持ち方で高く掲げる凜に、渚は本気でストップをかけた。こちらの心臓に悪い。凜は不満そうな顔をすると、楽器の先端部分を引っこ抜いた。まさかそれを投げつけてくるのではと思ったが、どうやらただ片づけを始めただけらしい。
「もう吹かなくていいの？」
「今日は飽きたからいいや」
「そう」
「部活に所属してないとこういうとき楽だね」
何てことないその言葉に、部活も違うでしょ、と言っていた昼間の友人を渚は思い出す。渚は元から帰宅部だが、凜は一年生の秋ごろまでは吹奏楽部に所属していたらしい。詳しいことは知らないし知ろうとも思わないが、本人曰く「先輩とうぎゃうぎゃした」らしい。辞めるくらいだから、そんな可愛らしい言葉で片づけられるものではないだろう。しかし彼女は「オーボエは好き」と言って、部活を辞めた後でも、放課後は空き教室を見つけては気まぐれに一人演奏会を楽しんでいたようだ。渚が初めて凜と会話したまさにその日も、凜は一人、ホコリっぽい部屋のど真ん中で音を紡いでいた。
「好きだったよねえ、その子」
「え、何？」
ぼんやりと回想に浸っていた渚の耳に、予想外の言葉が放り込まれる。凜の視線は楽器に向いたままだった。
「聞いてなかったでしょ、人の話」
「…ごめん」
「やっぱさっき殴ればよかったかな」
冗談とも取れない声音で呟きながら、凜は楽器いじりを続ける。黒い管の内側を、深い緑色の薄い布が行き来する様を、渚はただ眺めていた。
「もう一度言うけど。その昼ご飯一緒に食べてた女の子、

絶対渚のこと好きだったよ」
「…どうしてそうなる？」
「少なくとも、渚のことが気になってたから、わざわざ勇気出して確認しようとしたんじゃん」
「まさか。そこまで仲良いわけじゃないし」
「わかんないよ。フクザツな乙女心はさっ」
乙女心。自分とは無縁そうなその言葉を口の中で転がす。今時、女性同士だからあり得ないとか無粋なことは言わない。ただ、それほど仲が良くない人間から送られる一方的な好意にさらされるのは、あまり良い気分ではないと思った。しかしそれも、「乙女心」なんていう甘くてロマンチックな言葉でコーティングされてしまえば、まるで全く無害なもののように感じてしまうから、不思議だ。
昼間の友人が頭によぎる。安心したようなあの表情は、一体どんな感情に起因するものだったのか。考えようとすればするほど、頭の中がどろどろに溶けていくような錯覚に陥った。あのクリームパンと一緒だ、と渚は思う。自分は、あの万人受けする甘さは頂けない。かと言って、誰にどんな感情を抱いて欲しいのかもわからない。溶けた脳みそでは、いつの間にか近づいていた友人にも気づくことができなかった。
「そのパンどうするの」
ふいに投げかけられた問いに、渚は我に返る。自分の手元のビニール袋には、一口分残ったクリームパンが申し訳なさそうに居座っていた。買ってみたもののやっぱり苦手で、仕方なしに残してしまった一かけら。
「捨てようかな」
吐き出した言葉は、思っていたよりも自嘲的だ。袋の口を縛ろうとした次の瞬間、白い手がそれを阻んだ。先ほどまで楽器を掴んでいた指が、渚の手の甲を包む。ふっくらとしたそれに、手だけでなく心臓までも掴まれたような気がして、渚は小さく息をのむ。自分のものではないシャンプーの甘い香りが満ちる。
「もったいないよ」
ささやかな窘めの言葉は、確かな質量と甘さを伴って、渚の心臓に深く沈み込んだ。